

# 「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

令和3年7月13日

農業技術課 広域普及指導センター

## 1 生育状況（実証ほデータ）

近年に比べて、草丈、茎数、葉色は並み、葉齢は遅れている。

幼穂形成期は、近年より2日遅い7月15日頃と見込まれる。

今後、気温が平年並みに推移すると、出穂期は近年より2日遅い8月6日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月13日 栽培実証ほ）

年次または 試験内容	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R3	5/16	65.3	24.1	523	11.7	4.2	39.6	(7/15)	(8/6)
R2	5/15	65.5	24.2	535	12.2	4.1	38.0	7/14	8/7
近年	5/14	65.3	25.5	550	12.0	4.2	38.1	7/13	8/4
前年比・差	1	100	99	98	-0.5	0.1	1.6	(+1)	(-1)
近年比・差	2	100	94	95	-0.3	0.0	1.5	(+2)	(+2)
良食味栽培・試験区	5/21	62.4	27.9	616	11.1	4.4	40.2	(7/20)	(8/11)
密苗栽培・試験区	5/16	64.6	23.1	533	11.5	4.2	40.6	(7/17)	(8/8)

注1) R3：生育観測ほ、良食味栽培・対照区、密苗栽培・対照区(合計12ほ場)の平均

近年：H29～R2の平均、良食味栽培・試験区及び密苗栽培・試験区：実証ほ4か所の平均

注2) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

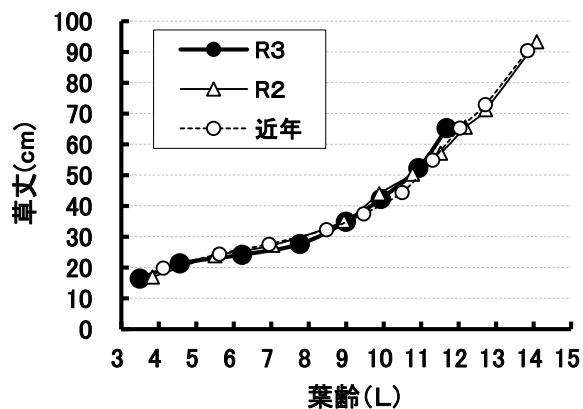


図1 草丈の推移（富富富実証ほ）

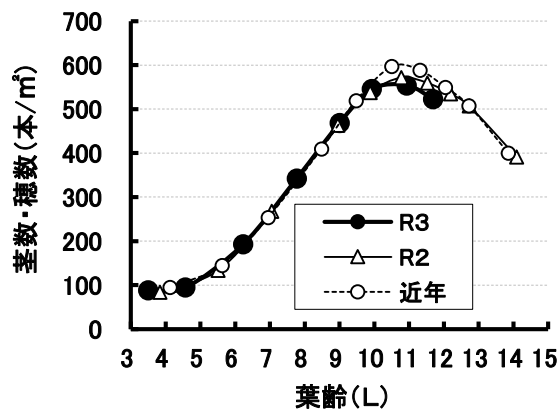


図2 茎数の推移（富富富実証ほ）

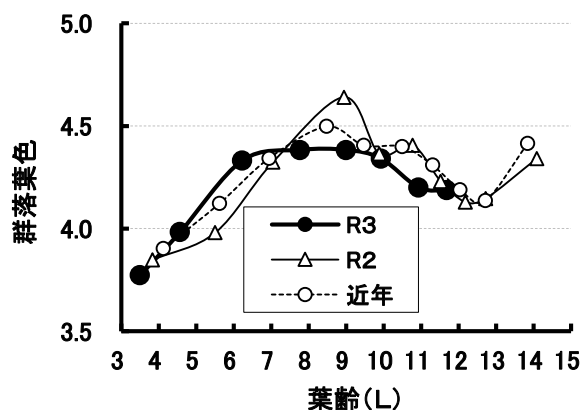


図3 葉色の推移（富富富実証ほ）

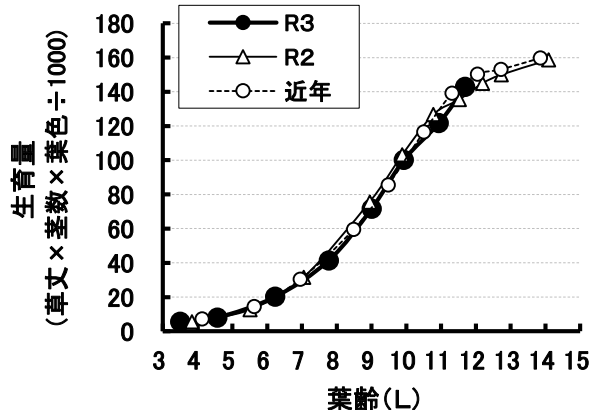


図4 生育量の推移（富富富実証ほ）

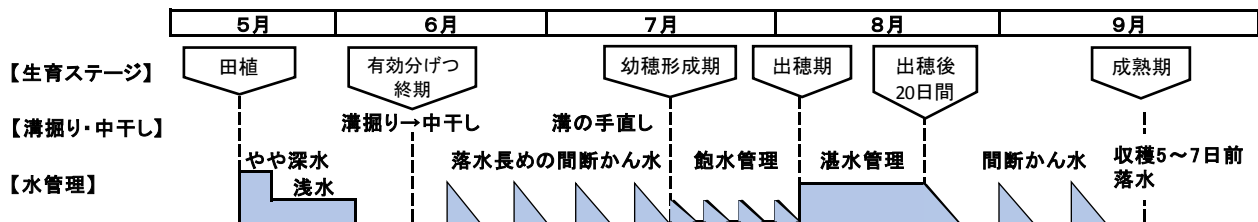
## 2 当面の技術対策

- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。
- ・ 分施肥における穂肥は、1回目を幼穂形成期の7日後頃に窒素成分で 0.75～1.0kg/10a、2回目を1回目の7日後に窒素成分で 1.5kg/10a を基本とする。

### (1) 水管理

- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。ただし、幼穂形成期の葉色が 4.2 以上と濃い場合は、間断かん水を幼穂形成期から7日間程度継続する。

#### <水管理のイメージ>



### (2) 全量基肥栽培における穂肥施用

- ・ 原則、追加穂肥は施用しない。
- ・ ただし、幼穂形成期の14日後の SPAD 値 32（群落葉色 4.2）未満の場合は、出穂3日前（走り穂が確認される頃）までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追加穂肥を行い、穂揃期の SPAD 値 35（群落葉色 4.4）に誘導する。

### (3) 分施肥における穂肥施用

- ・ 穂肥は1回目を幼穂形成期の7日後頃（幼穂長 15mm 程度）に窒素成分で 0.75～1.0kg/10a 施用し、2回目を1回目の7日後に 1.5kg/10a 施用する。
- ・ なお、幼穂形成期の茎数が 580 本/m<sup>2</sup>以上、または SPAD 値が 35（群落葉色 4.0）以上の場合、1回目の穂肥を施用せず、幼穂形成期の14日後頃に窒素成分で 1.5kg/10a を確実に施用する。
- ・ 2回目穂肥を施用する時期の SPAD 値 32（群落葉色 4.2）未満の場合は、穂肥量を窒素成分で 2.0kg/10a 施用し、穂揃期の SPAD 値 35（群落葉色 4.4）に誘導する。

表2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	SPAD	群落葉色	生育量	
				SPAD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量 SPAD : 草丈×茎数×SPAD÷10,000

群落葉色 : 草丈×茎数×群落葉色÷1,000

### (4) その他の管理

- ・ 病虫害防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が 12 以内となるよう留意する。